

翻訳

マリアンネ・ヴェーバー著

「議会的仕事形式—雑談」(1919)

掛川 典子

はじめに

本稿は、マリアンネ・ヴェーバー著『女性問題と女性思想』(Weber, Marianne 1919, *Frauenfragen und Frauengedanken. Gesammelte Aufsätze. Verlag von J.C.B. Mohr, Tübingen*)に所収の第15論文、すなわち最後の論文である「議会的仕事形式—雑談」(Palamentarische Arbeitsformen. Eine Plauderei. Weber 1919: 262-278)の全訳である。初出は1919年と記されているが、掲載雑誌名等の詳細は不明である。

1919年1月には、マリアンネ・ヴェーバー(Weber, Marianne 1870.8.2-1954.3.12)はバーデン州で州議会議員に選出され、当地の「ドイツ民主党」(Deutsche Demokratische Partei 略称DDP)の唯一の女性議員となった。また同年9月に「ドイツ女性団体連合」(Bund Deutscher Frauenvereine 略称BDF)の議長(1919-1923在任)にも選出された。さかのぼってマリアンネが、1894年にベルリンで創設された「女性の大学教育促進協会」(Verein Frauenbildung-Frauenstudium)のハイデルベルク支部を1897年に設立してその支部長に就任し、女性の高等教育参入のために講演会等を主宰し始めて以来、女性運動への長年の献身と活躍が広く認められてのことであった。この1919年秋にマリアンネは、講演原稿や雑誌論文や小冊子として発表してきた15本の論文を集め、論文集を刊行した。それが上記の著書である。うつ病のため長く教壇に立たなかった夫マックス・ヴェーバー(Weber, Max 1864.4.21-1920.6.14)もこの年には再び、単身ミュンヘン大学に赴任し、6月から社会学の講義を開始した。政治活動のためマリアンネは当初ハイデルベルクに留まり、同年秋にミュンヘンに移ったものの、講演旅行を重ねていた。しかしマックスは1920年に肺炎のためミュンヘンにて急死してしまう。紛れもなく1919年は、マリアンネの生涯の中で最高の年、社会的活動の、特に女性の地位向上運動にかかわる頂点の年であったと言えよう。

従ってこの論文は、1918年11月30日にドイツで初めて女性に参政権が与えられ、その直後初めての女性議員として議会活動を開始したマリアンネの貴重な体験に基づいている。1919年にマリアンネは最初のバーデン州議会で、新国家における女性の課題について演説した(Meurer 2010: 399)。その演説と本論文との直接的関係は不明である。マリアンネが議会の内側を仕事場として観察したとき、どのようなことに注目したのか、女性の議員であることの特別な課題をどこに見出していたのか、興味深い。本論文では、新参

者の一般的で初歩的な感想と言える第1節、第2節と比べ、特に女性議員の課題を扱った第3節が重要である。政治的駆け引きについての感想でありながら、マリアンネの女性観がここでも根底に見出される。初めての女性議員として、女性のための代表者であることと女性の特別な文化的課題を意識した活動を重視しながらも、究極においては人格主義的に要請される、性差によらない平等な参加を見据えていることも読み取れる。

訳出に当たり、いくつかの単語に特定の訳語を当てた。

Plenumは「本会議」。Delegierteは「派遣代表」。Volksvertreterは「国会議員」。Abgeordneteは「議員」。Nationalversammlungは「国民議会」。Landtagは「州議会」。Volksvertretungは「国会」。Parlamentは「議会」。Fraktionは「党派」。Parteiは「政党」または「党」。Maßnahmeは「措置」。Beratungは「協議」。Erörterungは「討議」。Aktは「審議」。Verhandlungは「交渉」。Kreisは場合により「圏」「範囲」「仲間」「輪」と訳し分けた。Sippeは「氏族」や「身内」とした。

また特徴的な単語に対しては原語を（ ）で挿入した。訳者の補足は〈 〉で記した。

Meurer, Bärbel 2010 *Marianne Weber.— Leben und Werk*. Mohr Siebeck, Tübingen.

訳 文

1.

最近の恐ろしい数か月に私たちに喜びと誇りへの誘因を与えた唯一の出来事は、ドイツ女性の完全市民（Vollbürgerin）への昇格であった。それをもって、まだ見通しのきかぬ石ころだらけと思っていた長い道の終点に私たちは到達し、そして同時に新しい困難な仕事への扉、しかしまた実り豊かな新しい仕事への、そして私たち女性の大きな自信への扉が開いた。多くの州では（例えばバーデンでは）、狭い路地と貧しい住まいの片隅にまで、女性たちを投票へと召喚するために辛くも2か月かかった。それにもかかわらずこれが予想外に成功したこと、すなわち、従来私たちには全く到達できなかった愚鈍な女性たちの圏内にも政治的な状況のための向学心、反響や責任感を呼び覚ますことに至る所で成功し、80歳を超える老女たちですら選挙日を女性の記念日として祝ったことは、私たち女性にとってかの暗い期間にさしこんだ光であり、全力投入の美しい報酬であった。そしてその後ある日私たちのうちの少なからぬ者が女性議員に選出されたときに、もう一度驚きと喜ばしい高揚感が、余りに恐ろしいものに粉碎され鈍感になっていた魂に活気を与えることができた。

バーデン国民議会の議員としての新しい課題圏への最初の一步が、私をカールスルーエ議事堂のドイツ民主党議員室のなかへ導いた。全男性同僚の目が新参者に、この党派の初めての、残念ながらこれまでで唯一の女性に向けられたとき、奇妙でやや不安な感情がわ

いた。というのは、例えば一段高い壇上の演台の所で、適当な距離の聴衆から多くの目が自分に向けられると感じることは、さもなければ、全く不慣れな新現象として、閉じられた範囲の仕事仲間の吟味する眼差しにさらされることは、何か別のことなのだから。しかし女性の新参者が、この輪のなかでさしあたり異質の身体として見つめられるように、同じようにこの者自身が、新しい仕事共同体の特色に対して敏感になる。この特色を男性の同僚と新参者は、その際何らかの特別なものが目立つということはなく、受け入れるのだが。さしあたり私を驚かしたものは、既により以前の州議会から相互に知っていた議員たち、彼らはそれでも出身や教育や人生観によってそして政治の色合いによっても非常に異なっているのだが、その議員の間での親密な二人称Duであった。——というのは、政治的な前存在において厳格に国民民主党の、全ドイツ的に政治色を帯びた国会議員の間では、古い生粋の民主主義者にいたるまで、ともかくわずかの相違もなかったのだから。この友好的な二人称Duは、「家内的な闘争」が起きたときには、すなわち、党派内部でも真剣な意見の相違が衝突したり、調停が困難かあるいは全く達成されなかったときには、初めは全く規則的というわけではなくまた例外なくではないが、全員によってまさにその際きっぱりと使用された。そのような状況においてはまさにひとは、明白にも「友人」という言葉を敵対者の名前にすることを常とする。たとえば夫婦が、非常に異なった見解であるときに、「愛する子」と呼ぶ習わしであるように。しかし一般に党派のなかで、見解の衝突がますます厳しくなる場合にはまさに、極端に配慮に満ちた語調を用いるのを常とし、精神の格闘においてはあらゆる鋭さは避けられ、ときおり現れる場合には適切でないとして退けられる。しかしひとは別の方法でなお個人的な連帯と調整を求めて努力する。小さな党派においては（バーデンにおけるドイツ民主党は25名をかかえている）住民でない議員たちが、何らかの仕方で可能ならば、共通の昼食卓に、また夕方定席卓に集まるだろう。さらに適当な機会に（例えば新参者が「処女演説」をしたときに、あるいはその他の快適な出来事の際に）小さな「家族の祭り」を祝い、しかもこの交際慣習は単に目的や交際要求を満たすことができるのみならず、もしも強制されない休暇時において雑談、冗談や悪ふざけが日常労働の灰色さを太陽の輝きで覆うとすれば、まさに個人的な親密さと共感の、あの雰囲気が発達する。その雰囲気は摩擦を減らし、決定的な瞬間に見解調整や意思形成の統一を容易にする。何か月もの間多くの日々と時間を相互に助言し行動し、そして相互の支援を必要としてきた人間は、その目の粗さが無数の政治的な日々を問いを未決定なままにする共通のプログラムで折り合うのではなくて、ある程度の個人的な連帯と共感をも必要とする。

勿論最大規模でも小党派の範囲内でのみ行き届きうる、共同体要求を満たすこの交際慣習の点で、今やこの建物の「社会学的な」構造が特に明瞭に際立つ。党員は単に、例えばある団体指導部の成員のように、その関係が長年の調和的協働に際してもたいい純粋に即物的に色づけられたままである仕事仲間であるだけでなく、繁栄と破滅に対しても相互に協力し合わねばならない一種の氏族（適当に考量して *cum grano salis*）を形成する。

そしてこの種の親族圏内部でのように、党派内部でもおのおのが特別な確信を持った明白な個人であるかもしれないし、共通のプログラムがそのための基準を与えることのない政治的な個別問題に対する態度表明は、なお非常に異なっているかもしれないし、ひとは人間的にあれこれの「党友」に惹きつけられるよりもむしろ反発を感じるかもしれない。——所属メンバーについての拒否する感情あるいは判断を外部者に対して隠すことが、上品な家族内では礼儀にかなっているように、党員が他の政党に対して閉じられた統一として団結し相互的連帯を管理させることをも、政治的感覚は要求する。というのは、党派の特別性は、他の仕事団体と異なり、単に心情連合そして目的連合のみでなく、古い氏族の仕方では、戦友（Kampfgenossenschaft）であることを通して特徴づけられているのだから。それは敵対者との日々の接触のなかにあり、一緒に壁一つ隔てて働いており、それゆえ、可能な限りの内的な閉鎖性をもって計画に着手することをいつも準備していなければならない。党派内部の意思統一の達成は一般に、本来的に建設的な議会的仕事の最重要な前段階である。この目標のために、委員会や本会議で討議せねばならない全ての対象は、党派のなかで予備協議される。そこで例えばバーデンの民主党はバーデンの憲法案のあらゆる個別条項を十分討議するために無数の日々を使った。閉じられた扉の背後で催されるこの仕事に際して、精神は見解が一様化してしまうまでしばしば激しく相互に格闘する。もし一致に到達できない場合は、投票が決定し、今や多数者の立場が**党派決議**と見なされる。この決議はまず多様な委員会に派遣された派遣代表に基準を与えるが、しかしまたさらに本会議のなかであらゆる個々の党員の態度にとって決定的であるべきである。——勿論、政党間の討議が委員会の庇護のもとで、あるいは変更された政治的権力情勢が新しい観点を生み出す場合には、党派決議はしばしば更新された協議の下位におかれる。というのは、最初に選ばれた立脚点への強情な固執は、たいいてい法律の成立あるいはその他の重要な措置（例えば組閣）を全く不可能にするだろうから。しかし他面で決議はまだ流動的で暫定的なものから、いつかは最終的で固定された段階に入らねばならない。そしてそうすると、著しい少数派あるいは個々の党派権威が、統一への善意にかかわらず多数派に矛盾したままである場合には何が起きるのか、という新しい問題が生じる。もし一党派が委員会協議に際してやまさに本会議において初めて一般に影響力を持つとするならば、その党派は敵対者との意見交換に際してその連帯を証明せねばならず、とりわけ採決に際しては分散してはならない、ということは明らかである。その内部で重要な機会には個々の成員がしばしば相違する個人的な信念を表現するような党派は、指導者のスローガンには従わないであろう何らかの別の闘争団体の場合のように、敵対者を助けそして自身の衝突力を弱める。それゆえ、見解が有権者に非常に近いので、彼らに選ばれた代表者は、個人的な信念を忘操堅固に固執しそれを表現するという権利があり義務づけられているとしても、このことは議員自身にとってはほとんど自明ではない。というのは、どんな孤立主義も規律崩壊であり、外観と影響が自身の身内を害することを彼は知っているのだから。自身の信念への服従か、あるいは自身の党員との連帯への服従かは——それは重い義務葛

藤であり、良心的で自立して思考する議員は自分がその葛藤のなかにいるのはまれでないと知る。

この状況では、すなわち、もし統一的な態度表明が多数派の決議によってのみ、従って議員の一部の同意に反して成立するならば、党派拘束が用いられるべきなのか否か、という重要な問いが、すなわち、全ての議員は委員会そして特に本会議で一致しながら是か非かを言うべきか、あるいは少数派は拘束なく自身の信念に従って行動してよいか、という重要な問いが、党派自身にとって生じる。社会民主党员の場合は無制約に党派拘束が支配しており、明らかに（バーデンでは）議会の右派の小さな敵対政党の場合も同様である。中央党は例外の場合自由投票を許す。例えばバーデン国民議会において、土地と建設用地とのほとんど全交渉を当局の統制のもとにおくという法律の協議に際して、これは起こった。この経過は勿論バーデンの議会にとってはそのような例外であったので、議会の左派から「非依存的中央党！」という呼び声が響き始めた。ほとんど例外なく古い自由な理想がしみ込んでいるドイツ民主党にとっては、投票を自由にすることは、身近な、折にふれて内的生活や最終的な評価に非常に深く根づいている問題に際して、党派決議に対し良心のためらいを持つ個々の会員に任されている。これは例えばバーデン国民議会で社会民主党员から要求された、公的国民学校に全ての子どもが通学するという義務化の問題についての議決の際に起こった。——その問題のもとでは、実際最高の個人主義的価値と社会主義的価値が厳しく対立する。一方では授業の自由という財と両親の教育権（というのは両親の家での子どもたちの個人教授も最初の4学年では禁じられているので）、他方では、大衆のための国民学校の向上と全国民の教育の統一の要求。対立的な立場が同様に有効な価値の両極に固定されているような中心的な問題においては（学校での宗教教育の形成は同様にこれに属しており、それはたぶん全ての国民議会において熱狂的な賛成と反対を呼び起こした）、しかし今やある状況下での党派拘束はまさに良心的な議員にとって軽減を意味しうる。というのは、現実的に深くそして狂信的にかたよることなく困難な問題について熟考する者は、人間にとって重要な全ての要件は2つまたはそれ以上の側面を持つという、「健康な人間悟性」によって通俗化された事実を、すなわち、しかしそれらの要件は、このような場合に重い責任よりも、最終的な対極的価値列からして同一の内的根拠と論理的首尾一貫性をもって矛盾して決定されうるという事実を、体験するのだから。そして良心的で視野の広い人間は、自分の立場が他の立場の妥当性を排除する「絶対的なもの」だ、とうぬぼれることはほとんどないのだから、そこで、実践的な成果を前もっては見渡せない断固とした措置の場合には、思考の結び目を切断し、決断を単純に命じる党派拘束にまで昇格した多数派の決議は、困難な価値葛藤からの個々人の救済を意味しうる。

2

党派決議は半製品である。それはしばしば非常に種類の異なる要素を、すなわち敵対的

な党派の決議や国会議会の残りの機関、特にまず委員会を伴うさらなる仕事へと導かれる。委員会は議会の中核機関である。委員会は様々な党派の派遣代表をその党派の勢力に関係して統一し、そしてこの選ばれた範囲内で本来の立法上やその他の政治的な仕事が生じる。党派から重要な委員会の委員に定められた者は、国会の仕事に創造的に参加する。一方で教育された法律家や経済学者に、他方で国家財政と国家金融のふさわしい専門家に、その際指導的な役割が与えられる。今月は最重要な法律作成の課題が全ての国民議会で憲法委員会に割り当てられる。諸委員会は、政府から提示された議案を私たちの国家形成物の全く新たな基礎づけへと一語一語入念に仕上げ、しばしば徹底的に改造し、本会議のために採決の段階まで準備せねばならない。委員会は其上、たいていは（例えばバーデンでは）憲法改正を通して必要になった多数の特定法の改正を導かねばならない（教会法、学校法、公務員法、土地収用法、市町村に関する法律など）。委員会内部で、特に憲法委員会では今や様々な政党間で本来の精神闘争が起きている。共通の仕事の魂の基盤はまずは、創造すべき法律に自身の政党理想からできるだけ多くを具現化するという、あらゆる党派の自明な意志であり、他方では、委員会内では他の場所ではありえない密接な仕事共同体として結びついている、敵対する党派との折り合いへの意志である。

恐らく少し前に選挙闘争で極めて忙しく戦って、相互にポスター形式の煽動（Plakatstil=Demagogie）で有権者を奪うよう努めた同じ人間たちが、今やここで仕事机と一緒に安全に座り、相互に敬意に満ち、親しげに、それどころかしばしば友好的にすら行動し、そして新参者が驚喜喜んで「ああ、いつもそうであったなら！」と考える、配慮に満ちた調子で争いにおいても専心するというのは、政治的生活の特別な現象である。事柄共同体とそれへの奉仕を世界観と政党利益の矛盾を越えて提供するという創造する仕事、今や巧みな票集めのかわりに閉じられた扉の背後で重要であるところでは、全面的な進取の気取りなしには一般に重要な法律や決議は成立しないであろうし、選挙闘争の騒音のなかで沈黙させられた全てのかの不可量物が、それは多様な個人の共鳴をそもそも初めて可能にするのだが、有益な仕事のために今や幸運にも再び効力を発する。ひとは互いに誠実に個別の立場の即物的な優越を納得させようと、あるいは、これが成功しない場合は、可能な限りの調停規定を見出そうと努める。——確かにこの圏内でもときどき、政党情熱が全く予期せず急に燃え上がり、一日中全ての実りある仕事を不可能にすることもある。それへの火花はその場合たいていはもともと知られた即物的な見解の相違から生じるのではなく、しばしば外から、例えば敵対者の仕事に対する様々な報道機関の政党的に色づいた批判から投げ込まれる。その時突然冷たい風が強く吹き、そしてたった今、まだ同僚として、また共通の事柄への完全な没入を一緒に働いた同じ人間たちとも決着がつけられ、敵として互いに怒鳴りあう。新参者は、自分には全く実りない時間喪失と見える状況の前に不安に立つ。——しかし互いにたった今いまだ鋭く脅していた同じ男性たちが、見かけ上破壊する怒りの稲妻の爆発の後で、新たに同僚としてまた以前のように協動的に共通の課題を始めそして互いに公明に恨みを根に持つことはない、ということ了新参者は驚

いて体験するだろう。政治的領域での最も鋭い敵対は本質核 (Wesenskern) の上に拡大される必要はなく、個人的な高い評価と共感を破壊する必要はない、ということは慰めになる。そして男性たちの特殊化への強い能力、すなわち即物的な部分目的における彼らの現存在の解体への強い能力は、個人的な本質核から離されているが、この能力は勿論彼らに、即物的な最も鋭い敵対と個人的な価値評価の間のこの分離を、全現存在の統一性 (Einheitlichkeit) と閉鎖性 (Geschlossenheit) の素質のある女性たちよりも容易にする。

共通の委員会仕事に際してあらゆる党派はある断念を用いる。というのは、自身の立場の不断の貫徹はほとんど一度も可能でないことを、そう、それはしばしば譲歩へと強いられるということを、どの党派ももとより知っているのだから。地方にいる自身の党友大衆にとっては政治的権力状況はどんな瞬間にも透明でありえるわけではないので、譲歩はその人たちによって弱々しい柔軟さとして、自身の原則への裏切りとして理解される。様々な欲求の満足いく溶解は、とうていいつでも可能というわけではない。破損箇所を隠さないはんだ付けの接合のみがときどき成功する。というのは、様々な見解の融合によってではなく、あれかこれかのようにのみ決定されうる無数の要件があるのだから。それから再び最後の手段 (ultima ratio) として投票が始まり、その際目下ほとんど至る所で最大の少数政党としてのドイツ民主党には、あれこれの側のために決定権を握る存在である、との責任ある課題が与えられている。

閉じられた扉の背後で遂行する立法者と政治家の仕事を一度のぞいたりそれに責任をもって寄与した者は、**政治は可能なものの技術**であるということが、民主的な議会において何を意味するかを明瞭に知っている。決定的な法律や行為を——例えば教会問題や学校問題において、取用業務や税金業務において、組閣に際して等々——そもそも成立させるためには、助言する、交渉する、譲歩する、断念することのどのような基準が、同じ権利で同じ責任をもって参加する全ての者に必要なのかを、その者だけが経験する。あらゆる重要な法律やあらゆる重要な措置は、単に様々な利益集団の間のみならずまた様々な世界観の間の闘争の結果であり、それゆえまさに民主主義的議会においては妥協になるだろう。なぜなら様々な政党の相互的な柔軟さなしには一般に何も成立しないだろうから。観察者にとって妥協に付着する不完全さは、それ以外は何も許さないだろう政治的な権力関係のほとんどの場合の帰結である。

3

委員会は、相互的な影響によって、また譲歩や断念によって、委員会が全員一致で支持できる法律案を最後に成立させたときに、その仕事を完成した。そうすると法律は可決するに十分成熟して、誕生の時に近づいており、その際今やその職務の助力者として本会議を管理できる。本会議の課題は本質的に、国会議員の総体を委員会の仕事に精通させること、そして提案の採用を通してそれに法的効力を与えることにある。勿論本会議によって

もなお変更動議あるいは補足動議が出されるが、それでも諸動議は、法作成に最適な議員たちがたいい委員会の仕事に参加していたのだから、重要で困難な対象に際して、いつも副次的あるいは儀礼的種類のものである。それでも予期せざる重大な矛盾の出現に際して、提示された議案が委員会に戻されることが起きる。しかしこのような突発事件は度外視して、本来本会議で立法者の行為に際し起きること全てがあらかじめ取り決められ、議会的仕事の定着した規則を通して指図される。委員会メンバーの範囲から任命された通信員は総会に、最後に提示された結果へと導いた交渉の進行を知らせ、それから総討議であらゆる党派が議案に対して立場を明らかにする。演説する人の順序と数はあらかじめ決められている。それは党派ごとの大きさに従う。従ってより大きな党派の成員はいつも、他者の前でもっと多く発言を許される二重の特権を持つ。何人の演説者を諸党派が自由な特別討議で相互に承認するかという問題は、しばしば前もって議院運営委員会（党派指導者の委員会）で決定される。さらに全ての重要な機会に演説の内容もまた党派内であらかじめ討議される。すなわち演説者として選ばれた者は自身の党員によっていわば「諮問される」。そして前もって党友の賛成を求めることなくしては、少なくとも党派指導者に、たとえ会議のなかで初めてであるとしても前もって通知することなくしては、一般に本会議では誰も発言を要求しない。従って議会は成員に演説の自由を与えることからはるかに離れている。むしろあらゆる重要な機会に際して能弁は綿密に誘導され合理化される。そしてそれは別様ではありえない。というのは、そうでなければおおよそ決議と法律が成立しないか、あるいは少なくともあらゆる審議に向けて十倍の時間を要するだろうから。重要な議会的行為に際しても輝かしい演説は投票結果にもはや決定的に影響することはない。というのは、おのおの党派の立場は自身の内部で予備協議を通して明らかにされ委員会決議を通して確定され、そして最後に狭い指導者圏がしばしば何週間かの交渉を通して成立させたものが、広い範囲の少数の専門家によって再び破壊されてはならないのだから。

本会議交渉は、遂行された仕事を本質的に**展示** (Schaustellung) するなかで、広い範囲のそれに参加しなかった議員たちの前や全国民の前でなされる。議員は自身の有権者に専門的知識と熱意を表明するために、本会議で本質的に「窓から外へ」そして新聞のために話す。この慎重な予備討議と意見交換の配分の結果は同一のテーマの様々な骨の折れる変形である。あらゆる党派は、立場を取るという自身の権利を用いる。しかし協議される対象を今や浸す様々な政党による照明は、ひとが風景をそれを通して見る、緑、赤、青のガラスとして、もはやその実質を変えない。この繰り返しは特に議会の新参者と単なる傍聴者の非寛容を惹き起すが、多くに分裂している政党生活が存在する限り不可避であり、そしてもし党派が既にグループ的な共同決議の根回しと個人的欲求の統一化を成し遂げていなかったならば、繰り返しは耐え難いまでに高まるだろう。本会議での非情な退屈への反動は、国会議員がしばしば互いに極度に気配りしないことである。演説者の対象にも人物にも特に関心がない者はただうわの空で聞く、ついでに新聞を読み、あるいは手紙を書く。ひとは本会議のなかで立ち去り、歩み寄り、音をたて、ささやき、そしてそれどころ

かまさしく遠慮ない個人的談話が様々になされ、その音が演説者の声をかき消さない限りはそれらを議長は無視する。厚い原稿とともに退屈と知られる長演説者が演壇に上ると、聴衆が慌ただしく去るだろうことを、彼は覚悟する。一般に総じて全議会の耳を異例に情熱的で演説の才のある議員のみが魅了するだろうし、その場合また、たいていは演説の既に予想された何<内容>よりも如何<語り方>を通して、より魅了する。第一級のこのスターに属さない者、原稿に縛られている者は——そしてそれが非常に有能で洞察力の鋭い仕事力であるのは稀ではない——彼の説明が自分の身内にも敬意に満ちた関心を持つて伴われることで満足せねばならないだろう。

前もって分配された役割を伴うこの登場に並んで、勿論演説と反論において自由に即興で行われたパワーゲームに余地がまだ残る。様々な範囲の民衆の考えられる全ての切望を議題にするために、以前から機会として用いられた財政論争があるし、それから特に外交の要件がある。自国と他国との関係は、その討議が勿論ほとんどもっぱら帝国議會を大きくゆすぶり情熱を与えるが、一方小国の議會には今のような激動する時代にのみ、そこから弱められていない波が打ち込む。それからあらゆる機会に、国会議員によって選ばれた政府が方針の責任を負い、批判に身をさらす。そして最後に多数の質問（議會での政府当局への質問）と政府への提案があるが、それをを用いて議員は、背後に立つ職業団体あるいは国家部分の日常の必要と経済的利益を討議にもたす。すなわち議會での政府当局への質問は、公的な悪状況の討議への最も人気のある安全弁であり、特にこの形式において国会議員たちは、どこに彼らによって代表されるグループの「悩みがある」かを政府に伝達する。有権者の選挙のため自分たちの熱意を全州の前に表明するチャンスを議員たちに与えるこの機会には、それ以外の場合よりも自由に溢れるような演説がなされてもよい。ここでは誰でもとにかく発言を許される。それゆえ多様な繰り返しや分かりきったことを持ち出しや陳腐さは、その際なおのこと不可避である。しかしそれについての激しいいらだちに襲われる者は——そして誰にそれが起きないだろうか？——、議会的仕事の価値やあれこれの特定の議會の業績を、本會議での演説で評価するのは全く不当であろうということについて、いつも分かっているなければならない。本来的な業績は党派室や委員会室の扉の背後で遂行されること、そして国民の目には最後の手続き完了段階のみが見せられるということ、決して忘れてはならない。

新参者にとってすなわち幻滅のもとになる議会的仕事の困難さは、本来的な法作成がおのずから小部分によって（私たちは議員の四分の一か五分の一と言う）なされうし、また実際になされている、ということから生じる。他の議員たちは稀にしか——例えば提案や政府への質問の提出や協議に際して——活動に至らず、一方で彼らは一般に傍聴と投票で満足せねばならない。それにもかかわらず、雰囲気上の外皮として創造する者の核を取り巻くこの広い輪もまた不可欠である。というのは、一面でこの輪は様々な職業集団の必要と要望を前者の核へと伝達し、そしてさらに国民と有権者の前で指導者の措置を代行し共同責任を負わねばならないのだから。議會の会合が、教育程度と経験範囲によって非常

に異なっている諸要素から、良い意味を持つことは従って絶対確実である。——議会は無論単に経済的な利害の遊び場のみであってはならず、純粋な精神闘争にとつての闘技場でもあらねばならない。そして国民が代表者にそそぐ信頼の度合いは、自明にも意義や明瞭さや精神力から国民が受ける印象によって決められる。それゆえ、一方で経済的な利益代表や個別問題における専門家や頭の切れる法律家が議会にとつて非常に不可欠なので、他方で、精神力や視野の広さや政治的情熱を通して公的な交渉をいつでも日常の利益の彼岸の世界に引き上げられる、優れて迫力のある指導者が議会には同様に必要である。どんな場合でも政党装置が意のままになる、そのような心を掻き立てる指導の人物なしには、議会は国民に国家的な自己感情や誇りある国家意識を吹き込めない。

長年にわたる実証において、これまで形成されたのとは原則的に異なった種類の、民主的な議会的仕事形式は考え出されにくい。根本において様々な地位や職業集団の純粋な利益代表者に他ならない評議会議会 (Räteparlament) は、同一あるいは類似の仕事形式を習得せねばならないだろう。そうでないと彼らは従来の革命的な評議会集会 (Räteversammlung) のように、言葉と仕事の間にはなほだしい不均衡がある単なる「雑談部屋」になってしまうだろう。そして今日の政党が世界観によって国民同胞のグループ化を、つまり真に民主的な仕方で、出身、職業、教育の様々な異なる国民同胞を統合する**垂直的 (vertikal)** 構成を可能にする一方で、評議会憲法は**水平的 (horizontal)** 構成で満足せねばならない。水平的構成は、その利益対立が超個人的理想を通しては結びつかないまま並び立っている、同一の教育段階の単に同一の職業の所属者を統合できる。政治的生活の統一はそれによつては期待されない。勿論従来の政党の場合に、新たな民主的な議会主義 (Parlamentarismus) にとつて、今まさに最も困難で圧倒する国民的不幸の時代に痛烈に必要なものは、新しく新鮮で迫力にあふれた人物の増額された手当 (Zuschuß) である。この人物たちはまだ、政党という機械に長年繋がれていたために古い思考軌道と仕事方法のなかで動けなくなっている、というのではない。新しい混乱した時代の要求に対処するために、以前の政治的経営のなかで老いた指導者の皆が、まだ弾力を所有しているとは単純に考えられない。

私たち女性は、この全く新しい作用可能性と責任の前に立たされているが、その上なお次のことを明らかにせねばならない。1. もしひとが本来的に創造する者の小さな輪に、いずれにせよこの年のうちに進出したいならば、国会議員であることは完全な職業訓練も同然である。というのは、ひとはその場合閉じられた扉の背後で実行される全ての仕事に参加せねばならず、そしてさらに自由時間には、政治の仕事のために自身の政党の内部でそしてその他に有権者の多様な願望のために、意向にそわねばならないのだから。常に協働している職業政治家のみが議会で影響力を得て、国家生活の形成に創造的に参加する。2. いつでもどこでも議席の小部分のみが、つまり推測上おおよそ10から15パーセントの議席が、女性に委ねられるだろう。この参加も、もし女性国会議員の正しい適切な選別が起こる場合は、特別な女性の利益 (Fraueninteressen) と「女性的な文化意志」を有効

に働かせるためには十分である。私たちは少数であるので、あれこれの利益代表女性が委任を受けるのではなくて、徹底的な一般教育と生活体験を持ち長年公的事柄と取り組んできたような女性のみが、選ばれることがきわめて重要である。そのほかに当然法律的かつ国民経済学的教育が望まれる。全霊を持って「参加している」教養あり成熟した女性のみが、指導者と創造する者の狭い輪に次第に適合するようになり、彼女たちからのみ力の共演に際して新しいトーンが鳴りはじめるだろう。当然男性にはほど遠いこの観点は、それゆえ政党内部で女性候補者たちの擁立に際して、女性の有権者自身によって無視されてはならない。というのは、完全市民権をめぐる予期せず速やかに完了した私たちの闘争の正当さは、女性国会議員が居場所を単に悪くまさにやじうまとしてではなく、名誉と完全な責任感で満たすことを通して今証明される、ということに関わる問題だからである。

そしてなお最後に、政治的活動は、その活動を自分の最重要な生きがいにする者のために特別の道徳的な誘惑をもたらす、ということがある。女性の政治的同権の反対者は、政治は人格をダメにするし、それゆえ女性はそれにはもったいない、という論拠をとりわけ使用した。私たちはこの主張をしばしば子どもだましとして解し、あるいは女性はその特性によって政治的生活の特別な道徳的危険に、男性のそれよりも大きな抵抗力を対置できる、という確信で自ら慰めた。前者が友好的な自己欺瞞ではなかったかどうかは、長い経験がこれから教えてくれる。しかしいずれにせよ初めて政治的装置のなかに巻き込まれた多くの女性が、そこから次のような非常に強い印象を受け止めるだろう。実際に政治家の、すなわち生活を政治で成立させている者の少なからぬ部分は、この職業の異常な道徳的危険に太刀打ちできない、すなわち、効用と権力を求める容赦ない努力や、いやしい功名心や、制御できない虚栄や特別な種類の不誠実さや陰険さに、太刀打ちできないという印象である。——信じている理念や、代理を務めようとする良い事柄をめぐる闘争は、高貴でない素材をもってしては、恐らくどこでも政治的劇場でのように容易には克服されない。つまり自身の階層の物質的な目的のための有権者をめぐる競争、あるいは自分自身のための委任、公職、役職への追求をもってしては。

新参者にとってとりわけ反発を感じさせるものは、例えばある選挙戦の次のような現象である。演説と書面における政党の煽動は、自身の政党のための目標の印象深い代行を通してのみならず、特に、敵対する政党の目標と人物の誹謗を通してでも宣伝するよう努める。よく組織された政党が選挙活動の目的で、敵対する政治家の言葉、演説や行動について、そのあと適当な時期にこの材料から敵対者に向けた矢を用意するために、入念な個人書類を作ることは、非常に不快感を与えて体験される。一般に大衆を興奮させるための様々な通例のポスター形式の煽動が反発を感じさせるが、その煽動は全てをやり過ぎており、粗野にし、そして演説者自身が発語する瞬間に既にその実現可能性を心から信じているわけではない約束を有権者にする。——政治的闘争における女性の新参者は、例外なく政党戦略のそのような手段の行使を拒否するだろう。しかし既に数年来政党生活に参加した個々の女性政治家の公的出現の仕方は、残念ながら私たちの性である女性もまたそのよ

うな習慣への滑り落ちに対して、断固とした抵抗力ができていないことを示す。

議席をめぐる同一政党の所属者間の狩猟競争は、不快感を与え同時にこっけいにさらに「素人」に作用する。そのための最大の余地を市参事会選挙（Bürgerausschußwahl）は提供する。なぜなら、その選挙があらゆる地方自治体の内部でかなり広範囲に、影響力と個人的効果を得るために切望された好機を与えるのだから。それゆえ個人的名誉欲は市町村議員選挙の際に最も抑制できずに効果を表すように見える。選挙集会において市参事会のために全ての職業集団と都市圏の代表者が登場し、まさにこの階層やあの都市部の代表者が有能なメンバーを通して都市の治癒のためにいかに必要であるかを荘重な雄弁で説明し、そしてその際そのような者として自己自身あるいは親友を推薦するときには、いずれにせよそれは新参者にとってまさにグロテスクな演劇である。常に確信があるとは限らない集会に自身の願望を聞き入れさせるために、自身の「大衆性」が同業者のもとであるいは特定の都市部において良く見せて売りこまれ、そしてときどき、さもないとひとが別のつてを求めるとか、また特に、さもないと全支持者が敵対政党を選ぶだろう、という脅迫をもって演じられる。代表者の選出のためにそのようなやり口や類似のやり口を決定させる政党、自身の立身出世主義や、何らかの参加希望者の輪におけるある種の人気以外は何も推奨しない政党よ、災いあれ！政党の名声と宣伝効果はそれによって長い間には深刻な害を与えられる。というのは、政党の魅力を決定的にするのは決して目標やプログラムだけではなく、少なくとも同様に、政党が先頭に置く人物であるから。政党の外にとどまり選挙日にのみ政治的に活動する、無数の人間の決断のために、しばしばその人物は候補者たちに決定的影響を与える。

それほど多くの醜いちりを巻き上げる、議席をめぐる競争が終わるならば、幸運にも政治的空氣が再び清まる。煽動的なスローガンは、政党連合における問題の即物的な加工と、政治的な団体を通しての上述の建設する仕事の背後で消滅する。しかし勿論それらにおいても、公職と不労所得のある役職のための努力、妥当性と指導的地位への名誉欲といった情熱のゲームが支配する。新たに創造された民主的議会主義は有能な者に、最高の国家公務員への昇格機会を全ての以前の憲法よりも多く提供する。そしてもしあらゆる伍長が元帥杖を背囊のなかに感じたということが、ナポレオン軍において全く新しい重要な状況であったならば、あらゆる議員が原則的に国家における最高の指導的地位の継承権を獲得することは、今日政治的生活のために予測できない意義がある。この民主的な指導者選別のなかで才能ある者たちは政治的活動性へと計り知れず鼓舞されるが、しかし勿論それを通してさまざまに濁った情熱や欲望も巻き起こされる。高貴な衝動と卑しい衝動の解けない融合を伴う人間の本質を知る者は、それゆえ次のことに驚かないだろう。新しい生活形式のためには自明な行動規則が初めて形成されねばならず、その生活形式は知られざる道徳的誘惑も含むということに。それ以外の点では高貴な多くの人間の抵抗力は、その誘惑の突進に太刀打ちできない。この政治的機構に巻き込まれる女性たちは、恐らく原則

的に同じ目にあうだろう。

しかしこの困難な時代に女性たちはまさに今新参者として別の世界から、使い古されていない道徳的判断力をもって政治的生活のなかに踏み込むのだから、濁りのないまなざしを危険と醜さのためになおも所有している。女性たちが政党同盟内部で並びに国会内部で政治的指導性を得る見込みは非常に小さく、そして彼女たちは女性であること (Frauentum) の結果としてほとんどの栄冠を得ようとは務めないだろう。恐らくまさにそれゆえこの特別な作用形式の危険は、女性にとっては男性にとってよりも実践において小さい。女性たちがあれこれの理由から醜い情熱によってまだ汚れていないこと、そして、女性の協働が政治的生活に祝福をもたらすだろうという、私たちの以前の確信にまさしく与える、純粹さと即物性の雰囲気や女性性の全行動を通して放つということが、いずれにせよ願われ希望される。

(かけがわ のりこ 大学院生活機構研究科生活機構学専攻教授)